
女子大生の異世界見聞録

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女子大生の異世界見聞録

【Nコード】

N3013R

【作者名】

Rail

【あらすじ】

平凡な女子大生が旅行中に不思議な扉をくぐったことから異世界にトリップしてしまう。不思議な世界に戸惑いながらも、観察し、考え、記録していく女子大生の異世界見聞録。終始淡々とした調子で進みます。 ※拙作「正しい勇者の育て方」の主人公の母親の話です。ファンタジー世界に対する考察がメインです。

前提

私は正気である。

私の名前は空野美央である。

私は日本時刻で2010年5月4日の時点で21歳である。

私は日本人である。

私は大学生である。

日本に在住しており、旅行のために京都を訪れていた。

現在私がいる場所は、日本ではないと思われる。

我思うゆえに我ありとデカルトは言う。

思考の停止はすなわち死である。

この状況を観察し、疑い、考えていくことこそが私が生きているという証拠である。

観察をし、分析をすることで冷静になることもあろう。

この世界が何なのかまだ私には分からない。

しかし記録を続けることにより、私が私であるというアイデンティティは保たれる。

いつかもとの日常に帰る日まで、私は正気を保ち続けよう。

5月4日

京都へと小旅行中、市街地の道の外れに風変わりな扉を見つける。
午後二時。

白い大理石に似た扉だった。装飾は植物がモチーフか？　ギリシヤの神殿を彷彿とさせる両開きの扉。

鍵はかかっておらず、かんぬきなども見受けられなかった。軽く押すと開いた。それと同時に引っ張られる感覚があり、気付いた時には扉の中に吸い込まれていた。原理は不明。強風などはなかった。強烈な光があり、目を閉じた。

光が治まった後に目を開けると、周囲は森だった。先ほどまでの市街地の面影はない。振り返っても先述の扉は存在しなかった。

森は主にブナやナラに似たもので構成されていた。下生えはリュウノヒゲとカヤとシバを足して割ったような植物。私の足首が埋まる程度の丈。シロツメクサやカタバミに似たものも見られた。

視認できる範囲に家や道路などは見受けられず。聴覚に頼るも、車の音などは一切なし。鳥の声、葉擦れなどしか聞こえず。

木は密集していないため、太陽が見える。時刻に変化はない模様。

私の身体を調べてみるも、変調なし。扉をくぐったときと変わらぬものと思われる。手荷物もある。携帯電話は圏外。理由としていくつか考えられる。

可能性1、携帯の電波を阻害するものがこの周辺にある。

可能性2、電波を中継する施設が電波の届く範囲にない。

前者の場合は電波を阻害するものを見つけ出す、あるいはこの場から離れることで解決される。

後者の場合、さらにいくつかの可能性が生じる。

可能性1、ここは日本の辺境である。

可能性2、ここは日本ではない。

どちらにしろ、私がそのような場所に移動するためには私に移動した記憶がない以上、一定時間以上意識を失っていたことになる。もしこの場所が例の扉の位置より離れた場所にある場合、空腹や体の汚れ具合などに変化があつてしかるべきである。しかし気付いた時には私は地面に立っていたし、最後に京都にいた記憶と格好は一致する。ならばどうやってこの場所にやってきたのか。

情報が圧倒的に足りないため、結論を出すのは早急のようだ。

十分ほどその場にいたが、変化なし。近くにけもの道を発見し、それをたどって歩き出す。

十五分経過。周囲に人家は見られない。植生に変化なし。動物との遭遇もなし。

三十分経過。小休憩。ペットボトルに入った飲料を飲む。未開封のお菓子は念のため保存しておく。

四十五分経過。電柱、道路、民家、看板など一切確認できず。

一時間経過。人家を発見。木造一階建て。カントリーハウス風。すぐそばにある畑で二十代後半と見られる男性が鍬を使って地面を耕していた。他のところにはトマトやナス、キュウリに似た作物が植わっている。

男性は白い長袖のシャツと、もんぺに似た黒いズボンを着用。革でできた紐靴を履いている。首にタオルを掛け、麦わら帽子をかぶ

っている。髪は茶色、肌はそこそこ日焼けしているが、顔立ちは西洋風である。

日本語で話しかけて見ると、日本語の返事が返ってきた。住所を尋ねたところ、この場所はカルクという村で、惑星シークのハノー大陸にあるタボイという国に属しているとのこと。いずれも聞き覚えなし。

男性に名前を聞いたところ、タタラと名乗る。

日本について尋ねるも、知らない様子。また、地球という惑星についても知らないとのこと。

こちらの事情を説明したところ、私はこの世界ではマレビトと呼ばれる存在だと説明される。外世界からの来訪者をそう呼ぶらしい。マレビトという呼称は民俗学で用いられるマレビトと類似したもので推察される。

マレビトは一定期間保護されるということで、カルクの村役場へと案内されることになった。

村役場への道中、アスファルトで舗装された道は見受けられず。石畳の道は栄えた町にしかないとのこと。電柱、アスファルトという単語は通じず。また、テレビやラジオといった言葉も通じず。存在自体知らないようだ。コーヒー、ベッド、シナリオ、ゲームという単語は通じた。

タタラが喋るときに注視してみたところ、口の動きと私の耳に入ってくる言葉は一致している。彼は間違いなく日本語を喋っているようだ。

彼の喋る言語の中には日本語に加えて外来語が存在するが、存在しないものも多くあるようだ。彼が単に無知なのか、そもそもそれらがこの世界に存在しないのかはまだ未確定である。

また、日本語以外に英語、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語でのコンタクトを試みるも、タタラには通じず。簡単な挨拶も通じなかった。彼によると、この国に限らず、全ての世界ではこの日本語に酷似した人語と呼ばれる言語が共通語であり、唯一人間が喋る言語なのだそうだ。

村役場は木造二階建て。ヨーロッパを彷彿とさせるデザイン。内装も昔博物館で見たものと似ている。

マレビト判定のためだと言って、文字を読まされる。東京特許許可局と書かれていた。何回か囁んだが、合格が貰えた。これを判定文に決めた人間は間違いなく性根が曲がっている。

村長から説明とともに書類を見せられるも、見たことのない言語のため解読不可能。説明によると、人語には日本語で言うひらがなとカタカナのような二種類の表音文字が存在するらしい。意味を付け加える傍点が存在するが、難しいとのことでは省略された。

マレビトは十日間の衣食住と教育が保証されとのこと。また、

一カ月は働き口が保証されているようだ。

それらは国からの通達らしいのだが、その後のマレビトの身の振り方については全くの自由らしい。奇妙なことだ。

マレビトが訪れる頻度は一年に一人、一つの星に来るかどうかどうかというレベルだという。だというのに、なぜ国はそれを知って保護するようにしているのだろうか。また、保護するのになぜ見返りを求めないのだろうか。疑問は尽きない。

一通りの説明が終わったところには日が傾いていた。時刻について聞くと、こちらの国でも時間は二十四時間なのだそう。部屋にあった柱時計で日時を合わせる。日本との時差は一時間十五分。

日付についても聞いてみると、今日は日本と同じく五月四日らしい。それからこちらは一年は十二カ月だそうだが、一カ月はきっかり三十日だということだ。うるう月がないということなので、公転や自転が地球とは異なるのだろうか。

これから一カ月は村長の家で世話になる。

村長の家は村長とその妻しかおらず、息子は留学している最中だそう。村長夫人はサリバン先生を彷彿とさせる格好だった。おっとりとした雰囲気、村長とは対照的に厳しそうな女性である。

夕食はパンとひよこ豆に似た豆のスープ、牛肉らしき肉の料理とサラダだった。やや大味。飲み物は葡萄酒。

村長の妻に客室に案内される。客室の調度は赤毛のアンを彷彿とさせた。近世ヨーロッパ風とでも言おうか。しかし調べた感じ、布地などは工業規格品ではないように思われる。産業改革前か？

なんにせよ、なぜ彼らが日本語を話すかという点は謎のまま。私にとっては好都合ではあるが、疑念は尽きない。

午後八時に就寝。疲れていたためすぐに寝入る。

5月5日

午前六時起床。天気は晴れ。

タボイでは湯あみではなく朝の沐浴が主流らしい。朝食前に村の近くにある川で沐浴する。

川には村の女性が六人、子供が十人いた。私がマレビトであるということは知れ渡っているらしく、好奇の目で見られる。

リリーという二十歳すぎの赤毛の女性に声を掛けられる。友好的。村の人たちは総じて金髪、茶髪など欧米人的な見かけ、大柄体格の人が多い。また、多少大袈裟なせいか話し方は洋画の吹き替えを彷彿とさせる人が多い。仕草なども欧米風に感じられる。

沐浴後の後に使うタオルは綿。化学繊維はまだ見かけていない。服は村長夫人が昔使っていたというものを借りる。エプロンドレス。エプロンドレスは子供服に用いられると記憶しているのだが、確認は後日する予定。スニーカーは知られていないらしく、私が履いているものを珍しがられた。運動靴というものは作られていないらしい。ブーツや革靴が主流だという。

村の女性たちは丈の長いワンピースか、あるいはブラウスとロングスカートといった服装である。靴はブーツ。色合いは暖色系が多いが、それほど鮮やかな色合いは見られず。やはり格好的に、中世というよりは近世ヨーロッパに近いものを感じる。

朝食はベーコンとチーズを挟んだホットサンド。チーズの臭みが強い。飲み物は牛乳。匂いがきつく、また味も日本のものと異なる。未加工なのだろう。

なお、ベーコン、チーズ、牛乳といった名詞は共通している様子。ミルクという単語も通じた。

朝食を食べ始める前に、村長夫妻が神に祈りをささげていた。神の名前を尋ねると、口に出来ぬとの返答。主と呼ぶのが通例らしい。

シークで広く信仰される聖書も存在する宗教とのこと。

神を信じているかと聞かれたので、仏教徒であることを告げる。

仏の概念を説明することに苦労した。

説明後、宗教戦争は遙か昔に終わったが、未だ無宗教の人間や土着の宗教を信仰する人間に対して攻撃的な人間がいるので仏教については公言をしないようにと忠告される。クエナ教と呼ばれる主流の宗教以外は異端として扱われているようだ。

食後に、村長からこの世界についての説明を受ける。

食事以外はひたすら座学。この世界のことを教わる。

この世界が何であるかはまだ分からないが、少なくとも、地球とは全く違って歴史をたどってきた、とんでもなくファンタジーな世界だということは分かった。

あまりにも突飛な内容だったため、少々頭が痛い。知恵熱が出なければいいのだが。

この世界のこと 聖書より

この世界についての説明は、クエナ教の聖書に基づいてかいつまんで行われた。

村長は信心深いようだが、他の宗教を信仰しているという私のために、なるべく簡略して教えてくれた。

クエナ教創世記

かつてこの世界は無だった。

そこへ一閃と共に神が現れた。

神の手には小さな玉が握られており、神はこの何もない世界を憐れんで、文字通り掌中の玉をこの世界へと置いていった。それが最初の惑星となった。

さらに神はたびたびこの世界へと訪れ、玉――つまりは新しい惑星をこの世界へと置いていった。

徐々に増えていった惑星は、神の計らいにより、互いに行き来できるようになった。それが「旅の扉」と呼ばれるものである。

惑星は着々と増えていたが、そのうちすっかりにぎやかになったこの世界を見た神は安心し、新たな玉を置くことはなくなった。

特筆事項

- ・創世記に、神が人を創る記述がない。
- ・創世期直後からの記録は数百年単位で紛失されているらしい。
- ・上記の理由により、以降の聖書にはいきなり発達した文明と多く

の国民が存在していることが示されている。

疑問点

宗教の創世記を本気で受け取るわけではないが、この創世記は地球のものよりも興味深いものだと感じる。

このクエナ教の創世記には、創世記にありがちな「神が人を創り出す」記述がない。にも関わらず、神は惑星を行き来する「旅の扉」を創り出している。ということは、「旅の扉」を作った時点で人かそれに類するものがいたのではないか。つまり神が持ってきた玉とというのは、すでに文明を持つ人間たちがいた惑星なのではないだろうか。

創世記からの資料が一切ないということは、その惑星の人間たちが「旅の扉」で互いの星を行き来し、侵略戦争を行ったという可能性もある。長きに渡る戦乱のせいで資料類が失われたと考えることも可能だ。

また、創世期以降に現れる文明については、現在とほとんど生活レベルが変わらない。聖書に記述されてからは数百年が経過しているらしいのだが。

何者かが文明の発達を阻害しているのだろうか？

魔王と勇者についての記述

かつて、世界を脅かす魔王が星々に現れた。魔王は己の邪悪なる魔力を持って生けるものをモンスターとし、従えた。人々を蹂躪し、星を汚した。

人々はそれに抗ったが、魔王の力は強大で、次々と散っていった。そんな中、勇気ある青年が神より授けられし力で魔王に挑んだ。不屈の精神と不死の体を持った彼らは彼らは勇者と呼ばれた。

勇者たちは次々と魔王を討ち取り、星々に安寧をもたらした。

以降も、神に選ばれし青年は勇者としての資格を得て、唯一魔王を倒せる存在となったのである。

村長の補足

現在でも魔王と勇者は存在している。また、モンスターも同様に存在している。

聖書に書かれている魔王よりも数がずっと増えており、現在では多いところでは大きな村や町に一人、少ないところでも一国や一大陸に一人はそれらを支配する魔王が存在する。魔王が増える仕組みは不明。

支配すると言っても様々で、それぞれの惑星ごとにまとめる魔王がいると言われており、そのまとめ役の魔王の性格によってその下にいる魔王たちの性格も異なる。

シークのまとめ役の魔王は基本的に攻撃的ではない。が、自分たちが攻撃された場合の反撃は激しく、決して自ら魔王側に攻撃してはいけないという暗黙の了解がある。よって、いくら弱そうなモンスターであっても、また襲われそうになっても基本的に攻撃してはならない。モンスターは見た目が自然動物よりも大きいのか、異形なので一目でわかる。また、モンスターは自然動物と違って死ぬとそ

の体が石のように砕ける。そして時間が経つと復活する。仕組みは不明。

勇者は当然シークにもいるが、勇者は神より資格を与えられるため、意図的に増やすことができない。また、勇者は天災や人災を最小限の被害で食い止めることができる人材であるので、どここの地域でも勇者を囲い込む風潮である。といっても、困った人がいれば助けに行かずにはすまないのが総じて勇者の性格なのだが。

特筆事項

- ・現在も魔王と勇者は存在する。
- ・勇者以外の人間には魔王を殺すことができない。
- ・モンスターは自然動物とは異なるものであり、死んでも復活する。
- ・勇者が勇者の資格を失わない間是不死の体である。
- ・勇者は神に選ばれなければならない。

疑問点

不死の英雄と絶対悪というのは神話にはありがちな話ではあるが、現在でも存在するとなると勝手が違う。

モンスターの発生源が魔王の魔力であるなら、勇者が結託して魔王を全て殺せばいいのではないだろうか。しかし魔王が増える仕組みが不明というのが気になる。そもそも魔王とは何なのか。

また、勇者が神に選ばれなければならないということは、神、またはそれに準ずるものが確かに存在するということになる。勇者が不死というが、どの程度まで死なないのだろうか。

モンスターについても疑問点が多い。死ぬと砕けるということは、

死ぬ直前に硬化するという事か。また、なぜ時間が経つと復活するのか。核となる物が砕けないと死なないのか。また、どういった科学的な変化が起これば生物が硬化するのか。

創世記についての記述は疑問点が多く、作られた可能性も否めない。というか、創世記が事実である可能性というのはどの宗教でも極端に低いだろう。

しかしこの聖書における魔王と勇者の記述については、村長の言う事実と多く通じるものがある。

ということは、創世記も何らかの形で事実に通っているのだろうか。

頭が痛い。

この世界のこと ファンタジーな点

魔法について

この世界には魔法が存在する。ただしマレビトは魔法を使えないらしい。

属性が存在し、火、水、雷、地、風、星、そして光と闇がある。

光は勇者のみ、闇は魔王のみが持つ属性。

魔法には適性があり、人間はあまり適していない。逆に人間以外の種族やモンスター、魔王などは大きな魔力を有している。

村長は火の属性らしく、魔法の手本として空中に火球を浮かべた。熱源、燃料となるものはなし。空気中の酸素を燃焼させたのか？

それとも幻覚か。

触れたところ、熱かった。触れた部位は軽い火傷を負った。幻覚によって体が錯覚を起こしているのかと思ったが、服の一部が焦げたため火球自体が熱を持つと考えられる。原子を振動させているのか？

火球に触れたことは村長から叱られた。治癒魔法なるものも存在するらしいが、体に良くないとのこと指に包帯を巻く。利き手ではなくてよかった。

魔法は体内にある魔力を使って発動する。魔力はレベルが上がる
と自然と最大量上がるのだそう。

聖書の時に、魔王が使ったのは邪悪なる魔力だったのではないかと質問したところ、魔王やモンスターが体内に宿しているのが邪悪なる魔力で、それ以外の体内にある魔力は別に悪いものではないのだそう。いまいち釈然としないが。

魔法の中には空を飛ぶものや、空間を転移するものがあるらしい。

また、呪いなども魔法に含まれるようだ。

レベルについて

この世界の人間にはレベルが存在するという。

文化レベルや知能レベルといった比喩的表現ではない。その人自身が進み上げてきた経験値によってレベルが決まっているのである。能力値と呼ばれるものも存在し、それによって力や素早さ、賢さなどが決まる。

非科学的にも程がある。レベルが上がったら能力値が上がり、身体能力が向上するという。しかし身体能力というものは日々の鍛錬による筋肉の増強や脳神経の学習によるものではないのか？ なぜレベルが上がるだけで身体能力が上がるのか。また、能力値に含まれる運とは何なのか。運とは言い換えれば偶然に恵まれているということである。レベルが上がれば自然と良縁に恵まれるということか？ レベルと運に何の関係があるのだ。体を鍛えたからといって運がよくなるならば、ボディービルダーやアスリートたちは全員宝くじの一等に当選していてもおかしくないではないか！

いささか興奮しすぎた。

ともかく、この世界にはレベルという不合理なものがあるらしい。測定石なるものが存在したのだが、私が試したところ測定不可能だった。これもマレビトの特徴なのだという。この世界の住人と違い、地球人はレベルを持たないはずだ。マレビトの身体能力はレベルに左右されないということだろう。

惑星間の移動

聖書にもある通り、この世界には複数の惑星が存在する。また、それらをつなぐ惑星間のワープ装置、すなわち「旅の扉」が存在する。

しかし一つの惑星から全ての惑星に行けるわけではなく、大抵は一つの星から五つが限度で、中には一方通行の道もあるということだ。扉は一か所に集まっているわけではなく、あまり見つかることはないが移動する扉もあるという。

また、惑星間の移動は当然と言えば当然だが制限がされており、旅の扉がある場所は厳重に管理されている。通る際には許可証が必要となる。空港のようなものか。

亡命目的の人間が大量流入しないのかと質問したところ、過去に一度その例があるそうだ。しかし旅の扉は両側から開けねばいかず、片方が扉を閉めてかんぬきを掛けると通れないらしい。鎖国ならぬ鎖星しているところもあるのだとか。

その他、一般的な礼儀作法などについて説明されたが、地球とさほど差はなし。多少男尊女卑の傾向があり、年長者を敬う傾向。王侯貴族も存在し、彼らを敵に回すのはよろしくないとのこと。

一回目の授業はこれにて終了。メモ用のルーズリーフが大量に消費された。

まだ質問したいことは多々あるが、私の質問があまりに多かったため、一通り説明してから質問するようにと釘を刺される。掘り下

げて聞き過ぎたせいで予定が押している様子。明日からは質問は要点を絞ろう。

それにしても、勇者や魔王、レベルだの魔法だの、この世界はRPGを彷彿とさせる。とするならば、私はゲームの世界に迷い込んだリアルに住人か。彼らの話を信用するなら、似たような境遇の間が少なからずいるはずなのだが。

そこまで考えて、状況をドッキリだとも幻覚だとも疑わない自分に気付いて愕然とした。適応しすぎだ。

自分の正気を疑いたくなるが、まだ大丈夫だと信じたい。

過ぎれば何でも思い出になる。こんな奇妙な場所のことだろうと。日本に帰ったらマルコポーロのように、ここでの体験を異世界見聞録というタイトルにでもして本を出版してみようか。印税で悠々自適な生活を送るのも悪くない。

早く日本に帰りたい。

5月6日 生活するにあたって

5月6日

午後六時起床。天気は曇り。

昨日も十分寒かったが、今日はさらに寒い。唇がチアノーゼを起して村長夫人から軟弱だと叱られる。

村の人間は春から秋にかけて沐浴を行うらしい。冬は室内でぬるま湯を使うそうだ。湯につかるという発想はないとのこと。薪が勿体ないそうだ。

朝食の準備を手伝う。朝はパンを焼くところから始まる。パン作りは重労働だった。筋肉痛の予感。

村長宅には魔法道具なるものあり。家電製品に似たもの。日本で言うところのガスコンロとオーブン。高価。

調理中の会話より、東の国では米や箸が存在していることを確認。地球と地形と文化の類似が見られる。

朝食後、二回目の勉強開始。

昨日質問攻勢をしすぎたせいで、村長の腰が引けている様子。引き続き、生活に必要な一般常識を教わる。

貨幣単位、生活必需品の市場価格、度量衡、戸籍とそれにまつわる税金などについて。

時間が足りないと村長が考えたのか、ランプに火をともして夜の九時まであれこれと教わる。

まとめ

貨幣

- ・貨幣は基本的に惑星が違ってても共通。
- ・古銭と呼ばれるかつて星での異なった貨幣も使える。
- ・単位はジェム。ドルとセントのような関係の単位はなし。
- ・コインには1、5、10、25、50、100がある。欧米式？
- ・紙幣が流通している。1000、5000、10000。日本式？
- ・貨幣には偽造防止、消耗防止の高度な魔法が掛けられているとのこと。発行者は世界銀行とのこと。全ての惑星にネットワークを張っている組織。
- ・金貨、銀貨も存在する。金貨は100万、銀貨は10万。こちらも高度な魔法がセットされているとのこと。

疑問点

惑星が違ってても貨幣・紙幣が共通しているのは何故か？

飛行機があるため地球の裏でも楽々行ける地球ですら、国によって貨幣単位は異なっていた。ユーロですらここ十年以内に出来た共通貨幣、しかもヨーロッパのみにしか通じない。

移動手段に魔法やワープ装置があるとしても、全世界、全惑星で共通した通貨が使えるというのは非常に興味深い。共通の通貨の浸透を推し進めたとしたら通貨の発行を行っている世界銀行であろう。通貨に魔法をかけて摩耗・偽造を防ぐことで日本よりは通貨の発行数は少ないと思われる。

しかし通貨の流通をどのように行っているのだろうか。共通した通貨しかやり取りされないのであれば、富の偏りが生じないのだから

うか。

市場価格

- ・惑星、地域によって手に入りやすいものに差がある。砂漠では水が高い、山地では海産物が高い、など。
- ・日常に密接した食べ物日本とさほど差がないとすると、1ジェムは10円前後と推察される。
- ・必需品と言われる簡易の傷薬が非常に安い。絆創膏のようなものか？

・庶民の一カ月の平均収入から推察して、エンゲル係数がどうしても高くなりそうだ。

- ・衣類が高い。基本的にオーダーメイドとのこと。破れても補習して使うのが一般的。庶民は一年を通して十着もあれば十分とのこと。
- ・消耗品は割高。大量消費の傾向がないため？
- ・嗜好品が高い。庶民はあまり贅沢をしないとのこと。
- ・家賃はぴんきり。南京虫と同居でもいいなら二束三文とのこと。
- ・魔法道具は非常に高い。セレブのみが使う贅沢品らしい。
- ・デリで買うと割と安い。

疑問点

庶民の一カ月の収入は、農民のものか商人のものか。また、国や地域によって収入にバラツキはないのか。

衣類がオーダーメイドということは、工業化前なのであろう。魔法があるならばもう少し安くならないのか？

度量衡

- ・度量衡も惑星に関わらず共通。古の度量衡を使う地域もある。
- ・キロ、ミリなどに共通した点が見られる。

共通点…千分の一は単位の前にモニ、百分の一は単位の前にソミ、千倍はノラがつく。

- ・長さ 1ヤードくらい $\parallel$ 1メード。0.001メード $\parallel$ 1モニメード。1000メード $\parallel$ 1ノラメード。野良メイドと聞こえて微妙な気分になる。

- ・重さ 調理で用いる計量スプーンが地球のものと酷似。砂糖小さじ1が5ウランとのこと。1グラム $\parallel$ 1ウラン？ 放射線を発しているような単位。0.01ウラン $\parallel$ 1モニウラン。1000ウラン $\parallel$ 1ノラウラン。

- ・体積 1リットルくらい $\parallel$ 1リニカ？ 0.01リニカ $\parallel$ 1ソミリニカ。

- ・容積 立方メード、立方モニメードなど日本と同じ。
- ・面積 平方メード、平方ノラメードなど日本と同じ。

- ・総じて名称が異なるため覚えづらい。

疑問点

なぜ言語が日本語に酷似しているのに単位は欧米風なのか。しかも国際単位系と酷似している。

また、こちらも惑星に関わらず単位が同じなのは何故か？
惑星間の移動が激しかったのだろうか。論文や本など知識の流通

が激しいのであれば、単位が同じであることは納得できるのだが。

戸籍及び税金について

- ・マレビトに限らず、居を構えてから二カ月すると税金を支払う義務が生じる。
- ・結婚や離婚、出産や死亡などの場合は役所に届け出る必要がある。
- ・戸籍の更新は税金を払うと自動的に更新される。
- ・星間移動では関税のみ課せられる。
- ・諸々の諸税は国ごとによって異なる。
- ・国単位の税金、タボイでは住民税、所得税、地税が課せられる。
- 住民税…十五歳以上に一律課せられる。
- 所得税…農民などは収穫物でもよい。商人にも課せられる。
- 地税…日本での不動産税のようなもの。土地を所有すると課せられる。
- ・その他、細かい税などは地方領主の裁量で決められる。
- ・二カ月ごとに住民登録した役所から納税額が書かれた通達が届くとのこと。
- ・税金の未払いが続くと、強制労働が強いられるらしい。
- ・国税、地方税はどちらも領主がピンはね可能。

疑問点

税金が安すぎる。特に国税の割合を聞くと日本よりも断然安い。理由を尋ねてみたところ、大きな国になると一つくらいは国営のカジノを有しているとのこと。また、国の独占事業をどの国も有し

ているらしい。

強制労働は公共事業が多いらしいが、土木建築業はないのだろうか？

また、領主の不正を見張る仕組みはないのか？

この世界は学べば学ぶほど疑問が生じる。

もっとも疑問なのは、共通認識の広まり方である。度量衡、言語などは他者との認識を一致させるために生まれるものだ。それゆえに地理的に距離があるとそれらに差異が生まれる。交流がない地域とそれらが一致することも難しくなる。

また、通貨を同一とさせていることも疑問である。どの星に行ってもどの国に行っても通貨が同じなのは非常に便利であると思うが、統一までにどれほどの時間がかかったのだろうか。

それとも、よほど他の惑星や国との行き来が多かったのだろうか？村長によれば、創世記以外の最古の文書というのは数百年前のものだという。そしてその頃にはすでに度量衡や通貨は確立されていたという。文明が確立されたのは相当昔なのだろうか。にしては科学の発展があまりないのが疑問だ。

それとも期間に関わらず彼らは魔法を有するから科学を発達させなかったのだろうか。しかし村長宅や村の様子を見るに、魔法によって劇的に生活の利便性が向上しているようには思えない。なぜ言

語が共通していて度量衡も共通しているのに、科学的な発展がそれほど進んでいないのだろうか。

もしかしたら、文明が出来てから優に千年以上経過しているのに言語も度量衡も一致していない地球がおかしいのだろうか。

言語が異なるにも関わらず、それらを翻訳しては知識を取り入れ、余暇を持て余すほど己の生活の利便性を高めている地球の人間がおかしいのだろうか――？

5月7日

雨。

今日は文字について書きとり練習。小さな石板とチョークを使う。赤毛のアンのよう。

一日中書きとりをしたため、手が痛くなる。服を粉まみれにして村長夫人から怒られる。

ノートを一冊村長から貰う。また、書きとり用の万年筆を一本、鉛筆を一本。万年筆も鉛筆も見た目はシンプルなデザインでそれほど日本のものと変わらぬように見える。ノートは紙が分厚く、多少ごわついている。

鉛筆は万年筆のインクより多少安いが、文字がすぐにかすれてしまうためあまり使われないとのこと。

夕食時、近日中に村長の息子が帰ってくると知らされる。村長夫人曰く美青年らしい。村長夫妻の顔を見る限り期待薄。

夕食後、タタラが訪問してくる。未婚女性の元を夜に訪れるのはなんということだと村長夫人が怒ったが、村長の取りなしにより事なきを得る。タタラは気にしてくれていたようだ。

タタラとの会話中、夕暮れ以降には一人で外に出ないよう忠告される。モンスター以外にも厄介な存在がこの村の近辺にはいるとのこと。盗賊ではないが、若い娘をさらうとのこと。タタラはその正体について口を濁す。吸血鬼？

一時間ほどタタラの話聞く。多少下心を感じたが気のせいかな？最終的には村長夫人が遅いからと追い返した。

マレビトとの結婚は幸運を呼ぶという俗説があるので、男性に近付く際は十分に注意せよと村長夫人からの忠告。留意しよう。

結婚すれば衣食住にはある程度困らないと思うが、まずは元の世界へと戻る方法を探すことが先決である。

5月8日

曇り。温暖前線が過ぎたのかとても温かい。

今日は沐浴中止令が出た。女性限定。危険なものが来るらしい。村長夫人に尋ねようとしたところ、村長に必死の形相で止められる。口にするのもいけないらしい。

今日も沐浴はお預け。こんな温かい日こそ沐浴すべきだと思うが。ごねたところ、寝る前に桶に入った湯とタオルを用意して貰えることになった。

午前中の勉強にてマレビトについて尋ねるも、村長も詳しくない様子。マレビトは基本的小説に於ける存在らしい。

なぜタタラが出会ってすぐの私を小説に於けるような存在だと思ったのか疑問に思う。村長に尋ねてみたところ、現地住民にはマレビトが雰囲気で見分ける小説の回答。自覚はできず。彼らと違って私が魔力を有していないからか？

元の世界への帰還方法は村長も知らない小説のこと。国立の図書館などに伝承があるかもしれないという。

国の中心部にある図書館へは、ここから馬車などを使って十日ほどかかる小説のこと。魔法を使うと一日で移動可能らしい。ただし、術者がこの村には不在。移動魔法を使える魔法使いは希少小説のこと。異世界に関する記述を残した本を読むべく、午前中は読みとりの練習。

傍点傍線なしの小説は日本語でいうとひらがなとカタカナの小説のみ。傍点などを加える小説によってアクセントや意味合いを表す。難解。

さて、前日の会話ならびに本日の会話にて、菓子、歌詞、仮死、

下肢、貸しという単語を確認。それぞれの意味は漢字で書いた通りだが、音にすると全て「かし」である。

日本語には和語と漢語が存在する。表音文字である仮名と表意文字である漢字を組合わせて使うためだ。

上記に上げた「かし」は漢語と和語、両方が使われている。

漢語は一般的に漢字が連なった熟語で漢字音で発音するものだ。漢字の文字に意味が込められており、例えば「歌詞」であればその単語の意味を知らなくとも「歌の詩」であると推察することができる。

なぜ漢字の存在しないこの世界で、人語に漢語が用いられているのか？

村長に質問したが、明確な返事は得られず。蛙と変える、帰るなども同音であることを指摘される。よって、私の言う漢語が同音であっても不思議ではないだろうという回答。

腑に落ちぬが質問を重ね過ぎたため、村長からこれ以上の質問は受け付けないと断られる。

夕方から公共交通機関の使い方について教わる。

シークでは乗合馬車が主流とのこと。自動車は存在せず。自転車が存在する模様。ただし、身分の低い男性が使うものという風潮のようだ。女性がズボンをはくのははしたないという認識のよう。キユロットをつくって売り出せば女性も自転車に乗るようになるだろうか？

列車も存在すること。ただしルートはごく限られているよう。

乗合馬車は料金を先払い、列車は駅で切符を購入することのこと。また、駅馬車なども存在すること。乗合馬車との違いについては、駅馬車は主要都市間を結ぶ定期便であり、乗合馬車はもう少し

ローカルな地域を結ぶとのこと。お金さえあれば馬車の貸し切りも可能。

また、魔法による移動もあり。馬車とは比べ物にならぬほど早いが高額。稀に事故も起こることのこと。詳細を尋ねるも、利用することはないだろうと教えてもらえず。ハエ男現象か？ 村長は顔色悪く、追及は気の毒なので中止。

私が図書館に行きたいという希望により、図書館ならびに資料がありそうな場所のリストを貰う。また、周辺の地図も見せてもらった。

周辺地図は児童文学のファンタジー小説についていそうな地図。デフォルメされており、標高や地形などが分かりづらい。また、おどろおどろしい森や不気味な沼などが書かれている。解説したところ、迷いの森、底なし沼とあった。

村長の説明によると、カルク周辺は標高の低い山が多いとのこと。また、地図が精密でないのは軍事的な意味合いも兼ねるとのこと。戦争は数十年ほどは起こっていないらしいのだが。精密な地図は門外不出なのだろう。

さて、図書館までは乗合馬車で行くのが無難とのこと。徒歩では盗賊やモンスターの被害に合う可能性があるようだ。こと若い女性は危険らしい。

乗合馬車に乗るための資金を稼ぐ必要あり。

十日間の学習を終え次第仕事を斡旋してもらい、国立図書館へ急ぐ必要があるだろう。

5月9日

晴れ。少し汗ばむほどの陽気。

今日は沐浴が出来た。水は気持ち良いが、川底のこけなどのぬるぬるした感触には未だ慣れない。二度転倒。怪我はなし。

空を飛ぶ異形の飛行生物を確認。毒々しい紫色の体をしたプテラノドン風の生物。上空を飛行していたため、体長の目測は失敗。リリーによると、あれがモンスターとのこと。

朝食の準備中に村長夫人に味噌と醤油について尋ねるも、知らない様子。米文化のある東の国ならば存在するだろうか？ パン豆イモばかりなので、みそ汁や米が懐かしい。

引き続き読み書きの練習。必要な書類などの記入も行う。

書類の解説をしてから記入を行ったため、時間をかなり消費した。書類に不審な点はなし。

三時のお茶の休憩をはさんで村長による村案内ツアー。

村民からはいまいち遠巻きにされている印象。朝の沐浴で会話をするリリーや、その姪っ子たちには挨拶をされる。

村にある家は二十軒ほど。木造建築で、狭い家でも目算五十坪ほど。ほとんどが二世帯、または三世帯で住んでいるとのこと。農家が多い。ヤギや牛なども飼っている家がほとんど。犬も飼われているようだ。パトラッシュ風的大型犬。

経済状況はそれほど良くないのか、柵や屋根ぼろぼろだったり、窓ガラスが割れているところが散見する。また、畑の並びが不規則。休耕しているのだろうか？

それぞれの家のカーテンの隙間からのぞかれ、視線があった途端

カーテンが閉じられる。村長に村民は内向的な人が多いからとフオーローされたが気になる。

村役場以外に共用のゴミ捨て場、広場、教会などを案内される。

村外れにあるゴミ捨て場は煙突のついた石造りの建物。内側にある穴にゴミや糞尿を捨てるため、周辺も非常に臭い。井戸は近くにないので糞尿などを捨てても感染症などの心配は少ないだろうが。

村長によると、村長宅に限らず村のトイレは全て糞尿を穴に貯める方式とのこと。道に捨てるよりはマシだが、ぼつとんトイレと大差ないので非常に臭い。汲み取り屋が定期的に回り、回収してゴミ捨て場に捨てているようだ。肥料などへの再利用はなし。動物の糞尿もゴミ捨て場に捨てている。定期的にゴミ捨て場のゴミは焼き払って清めるとのこと。

衛生学について村長に尋ねる。なんと菌の概念は存在するとのこと。風邪や伝染病についても知識はあり、発展した町などでは上下水道の整備がされているそう。ただし、抗体や予防接種などは単語自体が通じなかった。

広場は行商が来た時の青空市や祭が行われる場所とのこと。特に何も無い原っぱ。祭のときには中心部に祭壇が組まれるらしい。

教会はクエナ教のもの。縦横二メートルほどのステンドグラスがあり。創世記の神が手の輝く玉を宇宙に向かって放つ様子を表現したものというのが村長の説明。私には神が玉を捨てているように見えた。

なぜか十字架が祭壇にあった。神が左手に持っているものなのだろう。キリスト教のものと違い、縦と横の棒の長さが同じ。それに丸い後光がプラスされた十字架もあるとのこと。

教会では毎日ミサを行うのだそう。確かミサという単語はキリスト教限定だった気がするが。五日に一度参加するのが普通とのこと。告解室もあった。神父が話聞けらしい。告解や神父という単語からすると、クエナ教はカトリックに近いのだろうか？ 聞いてみ

たが神父と牧師は同じ意味らしい。主に使われるのは神父らしいが。神父とも会い、話をした。信心深い柔和な男性。四十代か。マレビトに幸あれと祝福を受けた。少しばかり嫌な気分になったのは、私がクエナ教徒でないからだろうか。それともマレビトと言われたからか。

一通り見て回ってから勉強を再開。シーク全体の歴史や地理なども学ぶ。

世界地図を見る限り、地形は地球とは似ても似つかぬようだ。といっても、これもデフォルメされているため詳細は不明。五つの大陸があるようだ。私が現在いるハノー大陸が一番大きいということだが、事実とするにはやや信憑性が薄い。

ハノー大陸は南部が亜熱帯、北部が亜寒帯、そして中部が温帯となっているとのこと。現在いるタボイは温帯であり、四季があるとのこと。夏は乾燥しているそう。

歴史は世界史のヨーロッパよりは簡単ではあったが、国名が全て耳慣れないために覚えることは困難を極めそう。

シークでの歴史の流れを簡単にまとめると、創世記以降の数百年の空白を経て、五つの大陸に三十の国が出来ていることから始まる。侵略戦争や宗教戦争を経て十五の国となり、それぞれが文化に不可侵、不干渉の条約を結んで今に至る。

あまりにも簡単過ぎて胡散臭いほど。

しかし少なくとも村長が生まれてからこの辺で戦争が起きていないというのは事実らしい。

勉強用に史書と聖書を借りる。

寝る前に読めばいい睡眠導入剤になりそうだ。

夜半目が覚めると、部屋の扉が開いていた。タヌキ寝入りを続けつつ様子を伺うと、村長が私が寝ているかどうか確認していたようだ。

妙齢の女性の寝室をのぞくとはいかがなものか。その後も村長夫人が部屋に入ってきて、枕元で何か香を焚かれた。村長夫人が出ていくまで息を浅くしてなるべく香を吸わないようにした。彼女の退出後に気をつけて匂いを嗅いでみたが、どうやら催眠効果かそれに似たものらしい。少し嗅いただけで頭がくらくらしした。

部屋から出ようとするも、扉が開かず。ドアノブに鍵はないので、何らかの方法で外から固定しているのだろう。

念のため、窓から脱出の準備をして外の様子をうかがう。

夜半過ぎに村長夫妻が自室に戻る気配。また、外から人の話声が聞こえ、それが遠ざかっていったことから、村人が誰かと階下で話し合いをしていたと推測される。

村の重要な話をしていたので余所者に聞かれなくなかったのだろうか。

それにしては嚴重過ぎる気がするのだが。

5月10日

曇り。風が強い。

昨日の香は燃えカスすら消失していた。寝ている間に処分されたのか？

悪天候のため、沐浴は中止。

起床から朝食のときまで、村長夫妻に変わった様子はなし。

部屋に何か香の残り香がすると話すと、村長夫人の表情が一瞬だけ強張った。

その後、村長によって話をそらされる。

村長という肩書きはだてではないらしい。結構な狸だ。

今日はさらに細かいこちらでの慣習やマナーなどについて教わる。基本的にヨーロッパ風ではあるが、日本に通じることも多し。訪問時のコート云々は西洋風だが、敬語などは日本と同じようにしている。季節の節目を祝う風習あり。祝い事は日本や西洋とは名称が異なる。魔法が存在するファンタジー世界だからか？ おまじないの類が非常に多い。家畜を屠殺する前日に菓子を与える、年始に一年の無事を祈って木の実を天に向かって投げる、子供が生まれると近所の人にくろうそくを配るなど、馴染みのないものが多い。

午後のお茶の時間に、タタラがやってきた。

タタラは私と二人で話したいとのことだったが、村長夫人によって止められる。村長夫妻も同席の上で世間話をするが、タタラは村長夫妻を気にしている様子。結局半時間ほど話すも、世間話に終始。どここの娘が結婚して村を出ていく、誰誰の畑がモンスターに荒らされた、どこそこの店が割れたガラスを修理をせずに放っておいたためにそこから猫が入って店が荒らされたなど。また、私が本当

にマレビトであるのかしつこく確認される。

タタラが帰った後、淑女たるものという説教を村長夫人から賜る。彼女が夕食の準備を始めるまで続く。

純潔、貞淑、従順、出しゃばらない。随分と古臭い価値観だと思うが、こちらではこれが主流なのだろうか。

夕食後、マレビトについての記述のある本はないかと尋ねたが、ないとの返答。例の図書館には存在するかもしれないとのこと。いつもより早く睡魔が来たので、勉強を切り上げて部屋に戻る。

夜、私が寝入ったことを村長夫人が確認に来た。

本日も香を焚いた後に退出。昨日よりも量が多く、息をつめていても頭がぐらくらした。夕食に盛られたらしき睡眠薬の効果でさらに眠い。しかし眠っては意味がないのでなんとか眠気を覚ます。受験用に覚えた眠気覚ましのツボがこんな形で役に立つとは。

空気の入れ替えをし、朝方に作ったロープで部屋から出る。日ごろの鍛錬の成果もあり、無事降りることに成功する。

なるべく音をたてないようにして明かりのついた部屋の窓へと近付く。今日は風が強いために気配を気取られる心配が少ない。

やや途切れ途切れではあるが村長と複数名の村人との会話を確認。どうやら魔王からの被害を減らすために、三日後にマレビトを生贄として差し出す予定のようだ。このマレビトというのは間違いない私だろう。三日後というのは最低限の衣食住の保証が終了する時だ。

決定に反発する声あり。聞き覚えのある声。タタラか？ しかし彼に賛成する声はなし。どうやら決定は覆せなかったようだ。

ユウヨクゾクにこれ以上好き勝手をさせていいのか、とタタラが

叫んでいた。こちらでも賛成の声はなし。

ユウヨク族？ 遊弋族？ それとも魔王の名前か。

話し合いが終了した模様。私も部屋へと戻ろうとしたが、油断していなかったにも関わらず、突然腕を掴まれて茂みに連れ込まれた。暗くて分からないが、体格からして男性。筋肉質でかなり力が強い。とっさの肘鉄、足払い、頭突き、関節技、全てをかわされ、笑われた。相手はかなり腕が立つようだが、害意はない模様。

マレビトかと確認される。声からして、二十代か。是と答えると再び笑う気配あり。体をまさぐられる。非常に不愉快。

払いのけ、攻撃を繰り返したが一撃も当たらず。相手はふざけている気配。体を抱えあげられる。一瞬の浮遊感の後、部屋の中に放り込まれた。二階まで飛んだのか？ 魔法の一種か。

男は足を外に出して窓枠に腰かけていたのがうすぼんやりと分かった。暗闇でも私がにらんだのが分かったのか、男が再び笑う気配。去り際に、命が惜しければこの村から出ることだと告げられる。そのまま気配が掻き消えた。

終始チェシャ猫のように笑っている不愉快な男だった。

直後、村長夫人の気配が近づいてきたのでロープの後始末をしてベッドにもぐりこんだ。

昔話においてマレビトが殺されるというのはよくある話だが、まさかわが身に降りかかるとは。

生贄というからには、魔王の前に差し出されるまでは生きているのだろう。

その生贄が幸福な人生を送れるならば、わざわざよそ者の人間を使わずとも村の人間で事足りる。無事では済まないのだろう。また、魔王が暴虐であるということは先日聞いたばかりだ。また、正体は分からないが妙な男からも警告をされた。

村長たちは被害を減らすと言っていた。つまりは、現在村が多少荒れて貧しい様子なのは魔王のせいなのだろう。タタラもモンスタ―が畑を荒らすと言っていた。もしかすると、マレビトと結婚すれば幸福が訪れるという言い伝えがあるように、マレビトを生贄に差し出すと何かしらのいいことがあるという言い伝えがあるのかもしれない。

あれが決定事項だというのならば、あと三日は猶予があるということだ。あの男の正体も気になるが、急いで対策を練ろう。

5月11日

晴れ。汗ばむ陽気。

沐浴で、女性たちがよそよそしい。リリーは私がいらないかのよう
にふるまっている。こうまであからさまにされると清々しい。村長
夫人はまだ隠していたいのか、私が淑女でないから近付かないのだ
と言う。

しか淑女でないからという理由で同情に満ちた視線を送られると
は思えないのだが、言わぬが花だろう。

朝食後、勉強。

いきなり魔王について聞いてしまえば不自然になると思うので、
勇者について掘り下げて尋ねる。

まず勇者の存在の割合を尋ねる。

囲い込みがあるとのことだったが、タボイ国の中でも複数名の勇
者を有するらしい。

しかし数が少なく、中央に集められている様子。首都周辺に三人、
あとは地方都市に散らばっているようだ。

距離で概算した結果、日本でいうところの地方（北海道・東北・
関東・中部・関西・四国以下略）に一人という分布していることにな
る。移動手段に魔法という反則的な手段があるものの、少なすぎる
ような気がする。

そのことを指摘すると、村長はやや渋い顔をした。聞かれたくな
いことらしい。

十分近く食い下がって聞きだすことに成功。どうやら以前に大規
模な勇者の流出があったらしい。といっても原因は魔王ではない。
タボイの国にいる勇者たちが、他国に卑劣な手で引き抜かれたと
のこと。詳細は不明。村長は全て他国とその画策に乗った勇者が悪

いという論調。いささか疑わしい。

魔王について聞いてみると、魔王は勇者よりも密に分布している模様。日本で言うなれば、都道府県に一人というレベル。勇者との比率では明らかに魔王側に分がある。

が、今のところ魔王側からの大規模な侵攻がないため、なんとか壊滅的な状況には及んでいないのだそうだ。

このあたりを支配する（と言うとなにやら引っかけを覚える。人間を治めているわけではないだろうに）魔王について詳細を聞いてみる。

この前は歯切れが悪かったが、今日は詳しく教えてくれた。

このあたりを治める魔王は基本的に放任主義。全身に鱗があり、ぎょろりとした目をしている。トカゲのような容貌で、体長はおおよそ5メートル、すなわち5ヤードほど。口から火を噴く。川魚が好物。夏は涼しい川底で寝ている。

——とのことだが、説明中、村長が普段よりも僅かに早口であり、饒舌だった。視線も時々彷徨っていたし、嘘だと思われる。さりげなく『大丈夫』という言葉を連呼していたが、前夜のことを思えば私を油断させようと思つての言動だと考えられる。

魔王の説明の直後に、ユウヨクゾクについて尋ねる。村長の顔が一瞬だけこわばったが、すぐに平時の顔に戻る。やはり狸だ。

どこで聞いたのかと尋ねられたので、前日に借りた本に出てきたと答える。事実、以前に借りた本の一節に一度だけ出ていた。ついでに本に併記されていたリュウジンゾクについても尋ねる。

村長はやや安心したようで、説明をしてくれた。

ユウヨクゾクとは有翼族、つまり翼の生えた人間のことらしい。もともとこの世界には各地に亜人が存在し、世界各地に分布しているのだそうだ。

ルーツは不明だが、一般論では有翼族は鳥と人間が交わって、竜人族は竜と人が交わって生まれた種族らしい。異種婚？

この辺に有翼族はいるのかと尋ねると、即答でいないとの返事。不自然なほど即答だった。

直後に話をそらされたために、詳細は聞けず。

間違いなく、この地域の魔王というのは有翼族なのだろう。

とすると、前日の盗み聞いた内容で気になることがある。

有翼族にこれ以上好き勝手を云々というのはどういう意味だろう。魔王というのは一族でなるものなのか？

昨日の男について考えてみる。

あの男が有翼族だとすれば合点が行く。空を飛べるなら一階から二階に飛ぶことなど容易だろう。鳥との混血種族なら、なぜ夜目が利くのか不思議だが、人間の血が勝っているせいと考えれば不思議ではない。至近距離でも姿がおぼろな闇夜では男に翼が生えていても見えなかった。

あの男が魔王側で、親切な人間だったという可能性がある。マレビットが生贄にされることを何らかの方法で知り、忠告をしに来たと一応つじつまは合う。

しかし昨日の男の様子から鑑みて、親切心というのは納得がいかない。むしろ、別の目的があって忠告したと考えた方が腑に落ちる。

では別の目的とはなんなのか。

私に逃げろと忠告した場合、いくつかのパターンが考えられる。

一つ、私がこのカルクという村から逃亡する。

その場合、村の人間はマレビットを生贄にすることができなくなる。生贄は別の娘で代替するか、もしくは中止になるだろう。

二つ、私が男のことを疑い、村長たちにそのことを尋ねる。

その場合、村長たちは生贄についての事を必死で誤魔化そうとするはずだ。

三つ、私が男の言うことを信じ、生贄の件についても村長たちに追及する。

その場合、私は問答無用で拉致監禁、最終的に生贄にされるかもしれない。口封じに殺されるというかのうせいもあるが。

四つ、私が男のことを信じず、誰にも話さず大人しくしている。その場合、私は上手いこと言いくるめられて生贄直行コースだ。ただし、生贄にされる状況によっては逃亡が可能かもしれない。

さて、この四つの選択肢の中で一番可能性が高いものを考えると、一つ目だろう。

村長たちの話し合いと男の忠告を合わせて考えると、何もしないのは愚の骨頂である。

二つ目、三つめも論外。完全なるアウエーで不審がられてはおしまいだ。

しかし、この世界のことをよく知らないマレビトが上手いこと逃亡できるものか。

長距離を早く移動する術がなければ、追いかけて捕まるのも時間の問題だろう。また、マレビトを生贄にするという風習が偏在していないという根拠はない。

しかし猶予は残り最長三日。一晩明けたから二日か？行動に出ねばならない。

村長が竜人族についての説明をしている最中に考え込んでいたため、件の説明を聞き逃す。

村長は説明に興が乗ったのか、妖精などについても説明を始めた。妖精は人が見ることができると、精霊はごくごく一部のものしか見ることができないらしい。動物などは精霊が見えるそうだ。精霊は紫外線か赤外線できているのだろうか。

昼食時、今後の身の振り方について村長夫妻に話を振ってみる。
やはり村長夫人は表情がこわばっており、視線をそらされた。逆に村長は親身になって相談に乗ってくれた。

保護が終わってからの仕事や、その後の身の振り方まで、おおよ
そ一年先まで立てられた予定を聞かされる。村長夫人は口を引き結
んで視線をそらしていた。

叶えられるはずもない予定だと知っていなければ、村長の言うこ
とに何一つ疑問を覚えなかったに違いない。

この世界で自分の身を守れるのは自分だけなのだと改めて確認し
た。

マレビトの保護というのは、実質マレビトの監視だと思われる。私が息抜きに散歩をしたいと言うと、勉強が追いつかぬからと却下された。

私の質問が多すぎたせいで勉強が追いつかぬというのなら納得は行くが、明らかに勉強ペースは落ちている。気張って教えなくとも、私が死ぬからであろう。

テレビもラジオも存在しないこの世界では、情報源が限られる。その情報源が村長夫妻だけだというのは非常に遺憾である。書物も厳選されているようで、今ほしい情報は手に入らない。

今日も夕食に何か一服盛られたようで、夕食後に猛烈な眠気が襲ってくる。前日よりさらに激しい眠気。身体への影響が心配される。次いで、村長夫人の催眠香。前日同様、嗅いだけで頭がくらくらする。この世界ではこういったものが簡単に手に入るのだろうか？

村長夫人の退室後、無理やり外に出ようとしていると人の気配。

前日の男。部屋が暗いために今日もやはり顔が見えない。

逃げないのかと問われたので、まだ逃げられないと答えた。

男が何者か誰何するも、笑って答えず。

至近距離まで近づかれ、ベッドに戻される。薬のせいで体思うように動かない。

有翼族かと尋ねると是と答える。

魔王側の人間かと尋ねると否と答える。

魔王と関係はないのかと尋ねると否と答えた。

有翼族であり、魔王側の人間でなく、魔王と関係がある。

となると、この男は何なのだ？

頭が上手く回らない。

そこでふと昼間に教わったことを思い出して、男に人間かと尋ねた。答えは否。

有翼族かと尋ねると是。

魔王側の有翼族かと尋ねたら是。

村長の言った通り、『人間』というのは他の種族が混じらないものを指すらしい。

そしてある推論が浮かんだ。

男が魔王であるのかと尋ねると、男は笑って答えず。

何が目的なのかと尋ねても答えず。

気の強い女は好きだと言われる。脈絡がない。

魔王が生贄を差し出すよう要求したのかと尋ねたら否とのこと。圧力をかけたのかと尋ねても否と。

となれば、生贄にはなんの意味があるのだ。

意識が朦朧として思惟がまとまらず。

男が私の頭に手をかざし、何か呪文を唱えると眠気も頭痛も一気に引いた。治癒魔法だという。

逃げてほしいのかと尋ねると、どちらでもよいと言う。よく分からない。

考え込んでいる間にベッドに押し倒されていた。

暗いために男の顔は分からず。息遣いと体温のみ分かる。面白そうに笑っている気配。

攻撃をすれば今回は成功した。男がうめく。

実力では男の方が上だと思われるので、逃亡を試みる。が、ドアが村長夫人によって固く閉ざされていることを失念していた。ドアは開かず、叫ぼうとしたところ何故か急に声が出なくなった。恐らくは魔法であろう。

男がすぐ背後に迫っている気配がした。

私の間合いに入る直前に男は足を止め、笑った。

そしてまた来ると言い残してそのまま飛び去っていった。

よく分からない男だ。

敵か味方の判別がつけがたい。

その後、窓から出ようとしても魔法が掛けられているのか出ることが叶わなかった。

明日に備えて就寝する。

5月12日 — 1 —

晴れ。心地よい天気。

今日の沐浴では、女性たちは昨日の態度が嘘のように好意的だった。

昨日は私を無視していたリリーも、お菓子をくれた。クッキーのような焼き菓子。中に木の実が入っていた。

他の女性たちからお菓子をもらう。謝罪の印だろうか？

村長夫妻に不審がられたら困るので、体調不良のふりをする。

頭痛を訴えると、村長から休むように言われる。

鍵はかけられなかったが、村長夫人が階段下にいる状況では軟禁と変わらない。

現状を打破する具体策が浮かず焦る。

持ってきた荷物は取り上げられていないが、武器となるものは少ない。せいぜい組み合わせによっては火炎放射気になるであろうヘアスプレーと、護身用の特殊警棒ぐらいなものだ。化粧品も着替えも私を助けるものにはならない。袖の下にするにしても安いものばかりだ。

現状のまとめ

事実（見聞を含める）

- ・魔王は有翼族である
- ・村長たちはマレビトである私を明日、何らかの形で魔王への生贄

として差し出す予定である

- ・村人は反対していない
- ・魔王は生贄を請うていない

推測

- ・生贄は不幸な目に遭う（死亡またはそれに近い事象）
- ・マレビトの生贄によって、村の被害を減らすつもりである
- ・村長夫妻は私を逃がさないように警戒している

生贄というのがどのように供されるのかを調べられなかったのが悔やまれる。

が、恐らくは記録に残っている範囲内で人間を生贄に捧げて魔王の被害を食い止めたということがあったのであろう。

となると、村人が生贄を献することを中断させるのは難しい。村はひっ迫しているわけではないが、確実に衰退しているのが部外者の私でも見て取れた。

村の人間がどこの馬の骨ともつかない人間一人よりも、自身の明日の生活をとることは明白である。

そういえば、村人の中で唯一反対している人がいた。タタラだ。彼に協力を要請できれば、この村から脱出することも可能なのではないか？

ただ、彼とのコンタクトの手段がない。村長の屋敷からの外出はどうにか誤魔化すにしても、タタラの家は不明。また、村長夫人などに尋ねたとしても淑女の心得云々で教えてもらえる可能性が低い。

しらみつぶしに探すか？　しかし日の高い内には村の人間に目撃される危険性がある。

悩んでいると、窓から物音。視線を向けると、誰かが窓の下から小石をぶつけてきている模様。

確認してみると、タタラだった。

窓を開けて下を覗き込むと、タタラが手招きをしていた。人差し指を立てて、口に当てている。このジェスチャーは日本と同じ意味か？

そういえば、この世界に来てからボディランゲージで不自由したことがない。基本的な身ぶり手ぶりは地球、それも日本と同じようである。やはりこの世界は不自然だ。

しかし今はそんな瑣末事を考え込んでいる場合ではない。

少し待てとタタラに合図してから毛布で包んだトランクを簡易身代わり人形としてベッドに寝かせておく。

周囲に異状がないことを確認して、特殊警棒を腰に差して簡易ロープでタタラのところまで降りた。

なぜここに来たのかと尋ねると、君を助けに来たと言う。

村長たちがこの村ぐるみで私を魔王の生贄として差し出そうとしているとのこと。

明日には魔王のいる居城に、箱詰めにして差し出されるらしい。

なぜ私を助けてくれるのかと尋ねると、罪のない人を見殺しにするのが忍びないからだという。

また、彼が私に好意を抱いていると告げられる。

異性から告白されるのは初めてではないが、胸が高鳴った。吊り橋効果か？ 危険だ。

人目につく前にとタタラに服を渡される。私のとは違うが、フードの付いたマント。上から羽織って顔を隠したところでタタラに先導されて村長の家から離れる。

タタラについて、三十分ほど走っただろうか。森の中の小屋に案内される。ここで隠れていれば大丈夫とのこと。お礼を言うと、気にしないでいいと言われた。

私を庇ってタタラが不利にならないのかと尋ねると、バレたらなるだろうとのこと。しかし自分の気持ちに嘘をつきたくないのだと言う。手を握られてどぎまぎしてしまう。

他の村人から不審に思われてはいけないということで、彼は一旦自分の家に戻るようになった。

見送りに小屋の入口まで行くと、抱きしめられた。筋肉質で、しっかりした体つき。目をつぶると、キスをされる。情熱的。

明るいうちは危険なので、暗くなってから村を脱出しようと言われる。タタラが準備を整えて戻ってきてくれるそう。

必ず待っていてくれと言って、名残惜しそうにしながらタタラが小屋を出て行った。ほんのり残り香が漂っていた。

しばらくそのままの体勢でいたが、その後小屋の中を搜索。武器になりそうなものはなし。やはり闘う時には警棒か徒手でするべきだろうが、魔法で攻撃された場合、私にはなすすべがない。人との遭遇は避けるべきだろう。

小屋を出て、南に向かう。

十分ほど移動すると、複数人の足音が聞こえてきた。身をひそめて聞き耳を立てる。

話から察するに、私が逃げたことはすでにばれているらしい。搜索隊を組んで、山狩りをしているようだ。今晚魔王に生贄をささげる約束をしてしまったため、村人が犠牲にならないためにも私を探さなければならぬようだ。私は探査魔法なるものが利かないらしく、しらみつぶしに調べるしかないとのこと。好都合。

村人は私がそう遠くには行っていないと踏んでいるらしい。街道を封鎖しているかどうかは聞けず。

カルク周辺は標高の低い山が多いと言っていたので、街道よりは山越えの方が無難であろう。

村人をやり過ごした後、再び南に向かう。

小一時間ほど移動すると、泉を発見した。喉が渴いていたので、水を飲む。トランクは荷物になるから持たない方がいいが、ペットボトルくらいは持っていればよかったと少々後悔する。

泉の中に細菌が存在しないか不安だったが、煮沸する時間も物資もないため気にしないことにする。

居場所はばれていないはすだが、村人に接近することが多く、やり過ぎし続けたため時間の消費が思いのほか早い。また、肉体的にも精神的にも限界が近付いてきている。

少しだけ地面に横になっていると、人の足音が聞こえてきた。

身を起して逃げようとするが、接近スピードが速い。臨戦態勢でいると、現れたのはタタラだった。一人らしい。

タタラは私を確認すると、なぜあの小屋から勝手に出たのかと言う。

現在山狩りが行われていて、村長の魔法——私には見えない鳴り子のようなものらしい——によって、搜索範囲が狭まっているとのこと。見つかるのも時間の問題のようだ。

私はタタラに再度質問した。なぜそういうことを言うのかと。

心配だから、生贄になって欲しくないからとのこと。

私は重ねて質問する。

魔王がはっきりと生贄を要らないと言えば、村長は生贄を差し出

したりしないはず。しかし村人たちは生贄を中止にする様子はない。

ということは、魔王であるあなたが何も手を打っていないということ、あなたには何か別の意図があるのでしょう？ と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3013r/>

女子大生の異世界見聞録

2011年9月14日19時51分発行